特別支援学校中学部における音楽と動きによる表現の開発
～音楽科と体育科の連携による音楽の授業～

森下修次・滝澤かほる・印銀清佳*

1．はじめに

音楽療法家で知られている松井[1)]は，音楽療法における音楽の役割に関して次の10項目を挙げている。

1．音楽が知的活動を通らずに，直接情動に働きかける。
2．音楽活動は，自己愛的満足をもたらし易い。
3．音楽は人間の美的感覚を満足させる。
4．音楽は発散的であり，情動の直接的発散をもたらす方法を提供する。
5．音楽は，身体的運動を誘発する。
6．音楽は Communication である。
7．音楽は一定の法則性の上に構造化されている。
8．音楽には多様性があり，適応範囲が広い。
9．音楽活動には統合的精神機能が必要である。
10．集団音楽活動では社会性が要求される。

これらは音楽を使用した活動から期待される効果を述べたものである。学校における音楽教育ではこのなかのいくつかの効果を期待して授業を組み立てていく。特に特別支援学校においては身体的に障害がある，表現ができない，コミュニケーションがとれないことが日常生活にも大きな影響を及ぼしていると考えられるため，これら障害を少しでも緩和させたり子どもの能力を伸ばす上でも音楽の授業は非常に重要な科目ではないかと考えている。

ところで，特別支援学校における音楽の授業では身体運動による音楽の授業の可能性が大きいと考えている。スキルを伴う器楽や歌唱は生徒の能力により活動に多くの制限が生じやすいが，身体運動による音楽活動は一番スキルの制限を受けにくいと考えられる。そこで本研究では身体運動を基礎とした活動に焦点をあてて行った。

身体運動による音楽教育はダルクローズ[2)]によるリトミックが知られている。起点は同じだがリズム体操の方に発展したボーデ[3)]の体操論もあり，音楽と体育が共同して研究を行うのに好都合であった。

2．附属特別支援学校中学部における音楽科授業

かつての授業は18名の生徒を分けないで一つで行っていた。ＣＤ再生装置で奏でられる音楽に合わせて体を動かす動きやカラオケが主体であった。ＣＤやカラオケは便利な反面，生徒がＣＤの音楽に合わせようとするとリズムやテンポで無理が生じるなど，生徒によっては音楽の授業に実質的に参加できにくい状況を作ってしまうおそれがある。ただし，ここでの授業においてＣＤの音楽に合わせて行われる合奏の場合，ＣＤの音楽のみだと上記のような状態が危惧されるが，我々の経験から，そこに打楽器の生演奏を入れると幾分上記の傾向が緩和されるように思われた。特にプロの打楽器奏者が演奏に加わったときは，生演奏の効果がさらに高まったことを体験している。

現在では個々の生徒の実情にあわせるために，授業の最初と最後をのぞいて，普通に体を動かすことができ，グループ全体で活動が可能な「げんきグループ」と個々の生徒の見取りが重要な「のびのびグループ」の，２グループで活動を実施している。

3．動きの支援

授業を「のびのびグループ」と「げんきグループ」に分けてから，「げんきグループ」でリトミックを行った。ピアノの即興演奏に合わせて生徒が歩くこ

2007.11.30　受理
*新潟大学教育人間科学部附属特別支援学校

とから始めた。最初は音楽に合わせて歩くだけであったが，さらにピアノの演奏に緩急をつけて，それに合わせて歩く，ピアノの演奏に高低をつけて，高い音のときには背伸びした姿勢で低い音のときには低い姿勢になるなどの身体運動を行った。グループに分けた最初は全体でまとまった活動が十分できなかった生徒たちだったが，徐々に身体反応になれて，音が止まったときには動き求めるなど音と動きの関係を理解できるようになってきた。

さらに動きの変化に変化をつけ，単調なものからより複雑で楽しめるものを考えていたが，体操分野でプレーバンドという商品があるのを知って，それを使用してみることになった。最初は二人一組（三人一組）になってプレーバンドを持って揺らす程度であったが，徐々に難しい動きもできるようになっていった。意外に運動量が多いこと，リズムや動きが固定されないが相手の動きが伝わるなどいろいろなメリットが見えてきた。

4．体育科との音楽科の連携による授業

効果がある程度実感できてきてくると，今度は様々な動きを取り入れ発展させるための手だてが必要になった。そこで音楽担当の教員のみならず体育科の教員も助言や指導に加わってはどうかということになった。表1は滝澤の提案によるプレーバンドを使っ

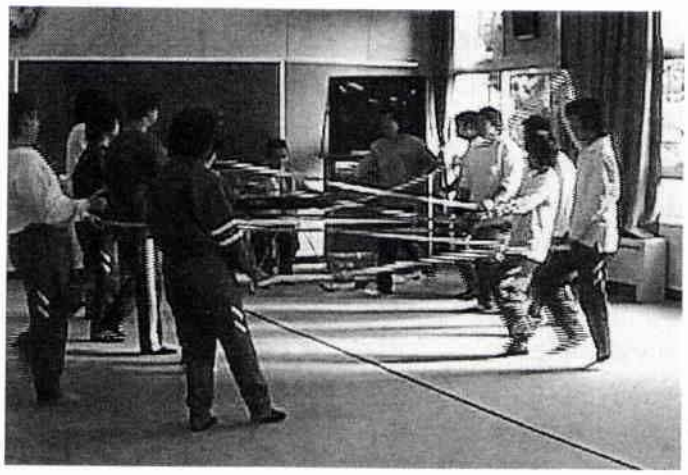

図1　授業の様子

表1　プレーバンドを使った運動の基本と工夫

一人で	
両手で持って	（引っぱる－弛める，横まげ，前まげ，後ろ反り，転がる，まわる，肩まわし，足かけ・・・）
床に置いて	（跳びこす，またぐ，上を歩く，踏んだままいろいろなポーズ）
まわす・振る	（からだの前や横で，頭の上で，まわして跳び越す）上へ投げる・受ける
二人組やグループで	
並び方	（向かい合って，横に並んで，背中合わせで）
つかい方	（引っ張り合う，引く－引かれる，一緒に動く）
動き方	（立つ－すわる，くぐる，とびこす，またぐ，歩く，走る，いろいろなステップ，まわる，振る，投げる－受ける・・・）
発展	
方向	（前へ，後ろへ，横へ，上へ，下へ）
リズム	（アクセント，拍子，テンポ）
いろいろな姿勢で	（立って，すわって，ねた姿勢で，バランス姿勢で）
動きの組み合わせ	（～しながら～する）
動きの連続	（～したら～する）

た動きである。また，音楽の授業に体育の教員が加わることで，今までと違った側面が見えてきた。図1に授業の様子を示す。

① 動きは何を目指すのか

体育の目指す動きはいかに美しく体の動きを見せるかということである。他方，音楽の目指す動きはリズムの体現化である。音楽における身体運動は美しい動作というより動きを通じてリズム感を養うこととされている。

しかしバロック以前の古典西洋音楽の世界では演奏を学ぶために必ず舞踊を行うし，またダルクローズ[2)]も自書の中で次のことを述べている。

1）リズムとは動きである。
2）動きは，本来身体的なものである。
3）すべての動きは，空間と時間を要する。
4）身体的経験が音楽的意識をつくり上げる。
5）身体的媒体が完成に達すると，知覚が鮮明になるという結果が生じる。
6）時間の中での動きが完成に達すると，音楽的リズムについての意識が確立する。
7）空間の中での動きが完成に達すると，身体造形的リズムについての意識が確立する。
8）時間と空間の中で動きが完成に達するのは，リトミックと呼ぶ身体運動訓練によってのみ可能である。

すなわち，美しい動きと美しい音楽のリズムは本来同一のものという考え方である。確かにこれだとボーデがリトミックからリズム体操の方面に行ったことに対し何の不具合も生じない。

ただ，我々の実際の指導を行う上で，動きを追求するのか，音楽に合わせて動きを引き出すのか，という問題意識が大変重要と感じた。音楽が「跳ねる」のならば動きも「跳ねる」ようにしていかなければ行けないし，音楽が「滑らか」ならば動きも「滑らか」でないと行けない。体育では動きが重視されるが，音楽では音楽の内包する「動き」を感じ取って表現することを重視する。この違いはあくまで途中の過程における違いであるが，例え過程であっても軸足をどちらに置くかは，生徒の何を退きだいたいかということと絡めて重要なことだと思われた。

② 完成は何を目指すのか。

そう考えると，動きの美しさを目指すのか，音楽リズムの感受を目指すのかにより，指導の力点が異なってくるように思われる。ただ，美を追究することは両方の教科にとって共通の目標であり，何らかの妥協点，あるいは積極的な解決策があるのではないかと考えた。今回のプレーバンドの動きはあくまで音楽の授業として始めたものであるが，最終着地点を体操発表会とし，体操として完成度を高められるかという観点でも授業を進めることになった。

5．体操発表会

体操発表会は新潟県体操研究会が主催して毎年催しているもので，附属特別支援学校以外にも附属小中学校や大学，一般校からの参加もある。特別支援学校ではＣＤの演奏に合わせた演技と今回初の試みとしてプレーバンドと電子ピアノの生演奏による演技を披露することになった。ピアノの演奏は森下が担当した。プレーバンドによる演技は表2の通りである。なお，体操発表会の演技は小中高合同で，合同練習は体操発表会の4日前の放課後に4日連続で行った。

表2　体操発表会におけるプレーバンドとなわを使った体操

①	2人組で両手に持った2本のプレーバンドを離れるように移動し引っ張る（8拍）。 元の位置にすぐに戻る（プレーバンドを緩める）。　×3
②	両手に持ったプレーバンドを音楽に合わせて左右に振る（16拍）。
③	後ろを向いて同じくプレーバンドを音楽に合わせて左右に振る（16拍）。
④	プレーバンドを持ったまま座ってシーソーをする（16拍）。
⑤	立ち上がってプレーバンドを高くもつペアと下を潜るペアの動きをする。
⑥	円上になる。
⑦	音に合わせて歩く。
⑧	ポーズで決める。

印銀がタンブリンを使って動きの指示と拍をとり，森下がそれに合わせる形に即興演奏をする形で演技を進めた。完成度を高めるためには体操の指導で行われている拍と動きを結びつけた指導が重要で本番前の4日間の練習では，主にその形の練習を行った。練習中の観察では，ＣＤ（曲目は**Dear WOMAN**）の動きと即興による動きを比べたとき，ＣＤ伴奏の方が動きに取っつきやすい印象があったが，反面動きが小さくなる傾向が見られたのに対し，即興による動きは，迷う部分も多かった反面，はまりだしたときの動きがダイナミックであるように感じた。やはりリズムが固定されるＣＤ音より生音の方が動きを引き出しやすいように感じられた。

6．まとめ

今回の音楽と体育のように，同じ方向性と異なった方向性を認識した上で行うことが，教科指導の実践の上で有意義であるように思われる。また，今回は体育的指導であっても体操発表会の演技に見られるように十分音楽的要素を引き出すことは可能なように思われた。むしろ，音楽表現，リズム体操両方の本質からすれば，ＣＤによる音楽を使う方が不自然で，生の演奏と演技が本来の姿であると考えられる。

謝　辞

今回，指導に協力いただいた新潟大学附属特別支援学校の教員の方々，ボランティアの学生諸君には大変お世話になりました。お礼申し上げます。

文　献

1）松井紀和　音楽療法の手引きー音楽療法家のためのー，pp.2-9　牧野出版
2）ダルクローズ（山本昌男訳）リトミック論文集　リズムと音楽と教育　全音楽譜出版社，2003
3）Bode-Band E.V.(Hrsg.), 75 Jahre Bode-Schule, Denger & Rauner Munchen, 1986